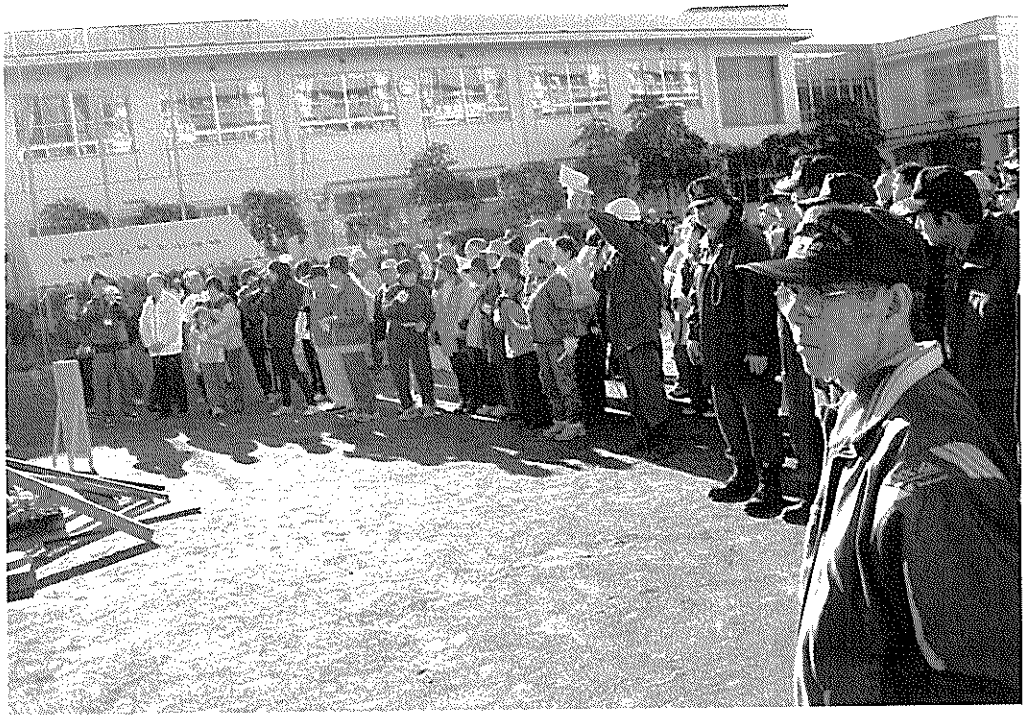
東海地震と戦う町づくりを
すすめる救護所訓練

平成20年度協働パイロット事業

（自）平成20年11月1日

（至）平成21年3月23日

ＮＰＯ法人　災害・医療・町づくり



静岡市立城北小学校　1,000名参加

１．事業の目的

東海地震はいつ来てもおかしくないといわれ、静岡市でも様々な対策、訓練が行われています。ＮＰＯ法人「災害・医療・町づくり」は、「地域が自分の地域を守る」ことを目指し、町内会単位での訓練を呼びかけ、現場で必要な具体的な訓練を行ってきました。自助・互助につなげることを目的としています。

静岡県や静岡市は、東海地震での被害想定を公表しています。市民は行政・消防や医療に大きな期待をかけています。しかし公表されている想定は驚くほど大きく、具体的な消防や医療の人間の数や救急車の数を対比させると、地元の消防でやり切れるものでないことは誰が見ても明らかです。
国や県や市の大きな話ではなく、おらが町の被害想定を知り、１１９に電話しても、消防・救急隊が来る可能性は殆どないことが理解できれば、おらが命、おらが家族、隣のおばあちゃんを、助けるにはどうしたらいいかをみんなで考え、そのために何を準備し、どんな訓練をしたらいいかを話しあえると思います。
この「気づき」と「生き残る意志」がなくては防災対策はできないでしょう。
ＮＰＯ法人「災害・医療・町づくり」は町内会と、その町内会の想定されている救護所（多くは小学校）でトリアージ訓練を行い、地域の被害想定を示し、初めの２４時間は助けが来る可能性はほとんどないことを説明し、自分たちの町を自分たちで守る訓練を呼びかけています。ここまでを「ステップ１」と考えています。「ステップ２」はこの呼びかけに答えて手を上げた町内会と地域を守るための技術を学ぶ訓練を行います。具体的には、①生き埋めになった人の倒壊家屋からの救出訓練。②救護所を立ち上げ、その地域で開業している医師によるトリアージ訓練。（東海地震が起きたとき実際に救護所が立ち上がるためには訓練でも地元の医師がトリアージをする必要があります）。③身のまわりにあるもので行う怪我の応急処置の訓練。④重傷者の病院までの搬送訓練を行っています。
このような訓練を繰り返すことで、東海地震で外からの支援が届かない早期にもその地域は対応できると期待します。また訓練に参加し身近で大きな被害想定を知ったことで、被害にあわないように、怪我をしないようにという、自助の意識が目覚めてくることも期待します。
静岡市の中でさらに多くの地域に広げること。さらには静岡市以外にも広げていくことを目標にしています。

２．事業の概要

１）　事業期間　平成20年１１月１日から平成21年３月23日まで

２）　救護所訓練

と　き：平成20年12月７日（日）

ところ：井宮小学校（井宮連合町内会）

城北小学校（城北連合町内会・県立総合病院）

参加者：①　井宮会場　約720人（学区住民、中学生、高校生など）

②城北会場　約1,000人（学区住民、中学生、高校生など）

内　容：救護所訓練（立ち上げ、運営、トリアージ）、救出訓練、搬送訓練

３）　防災研修会

と　き：平成21年２月28日（土）

ところ：静岡市役所１７０会議室

参加者：６８人（防災指導員、自治会・町内会関係者、ＮＰＯ関係者）

※このほか、城内中学校生徒４０人が参加。

内　容：①訓練報告（井宮連合町内会、安西学区ＰＴＡ、城北学区連合町内会、藤枝中央小学校）

②朗読劇「私たちの街はどうなるの？」城内中学校生徒

③講演「静岡市の被災状況」

④実習「災害時のケガの応急処置」

４）　協力機関（主なもの）

井宮連合町内会、安西学区ＰＴＡ、城北学区連合町内会、藤枝中央小学校、城内中学校、

５）　担当スタッフ

ＮＰＯ法人災害・医療・町づくり（安田、大村、小林、池谷、笠原加治、望月、諏訪、吉田、木下、気田、田中、千原、岩崎、山本眞）

３．まとめと提言

１）　はじめに

東海地震に対して、静岡では30年以上にわたり準備し訓練を行っている。しかしどこでも毎回同じような訓練（炊き出し、防災倉庫の点検、起震社体験、三角巾の使い方、消火訓練、避難訓練など）をしていることで、飽きられているうえ、東海地震で本当に役に立つことなのかと疑問に思う人も多い。
現在ある様々な防災訓練メニューの中から何ができるかを考えるのではなく、東海地震と遭遇したときに周囲の命を助けるためにはどんなことが必要かを考え、それに備える訓練をしようということです。できる訓練をするのではなく、必要な訓練をしよう、というのが我々の主張です。
そのためには「東海地震の第３次被害想定」に基づき地域の被害を想定し、さらにその地域の救急・消防や医療（公助）の能力を対比させることで、直面しなければならない状況を理解することがで必要です。
例えば城北学区で考えてみましょう。

２）おらが町の状況（城北学区で配布した資料です）

東海地震の被害想定

	建物大破	焼失家屋	死者	重傷者	中等傷	生き埋め
旧静岡市	15,853(/152,297)	24,156(/152,297)	701	2,625	11,977	3,803
城北学区	640(/3,169)	975（/3,169）	26	119	440	144
県立総合病院の周囲			217	824	3,814	1,207

＊ 市の数字は第３次被害想定として公表されているもの。
＊ 学区の数字は、建物大破数だけは公表されているもので、その他はそれを基に市の数との比で計算した数

助ける側の消防・医療の人数

旧静岡市の地域救護所　40ヶ所
消防・救急：470名、救急車　13台、消防団　1,300名
医師会員　300人、総合病院　6病院　医師数　約600人

上の二つの表からは、重傷者の搬送、生き埋めの救出、消火のどれ一つをとっ

ても消防でやり切れる数字でないことは明らかでしょう。個人的には消防は消火に全力を尽くすべきだと思います。
医療についても、病院は人員やライフラインが揃っていてもやり切れる負傷者の数ではなく、命の問題に絞って治療するしかありません。災害医療の合言葉は「普段なら助けられる命を災害だからといって失わない」ことです。死なない怪我は後回しになります。医師会員も全員が救護所に駆けつけられたとしても、医師だけでトリアージ応急処置をやりきるのは大変でしょう。
地元の医師は病院や救護所で能力以上の負傷者に対処しなければならないので、災害現場に医師がいる可能性はありません。

3）ＮＰＯ法人　災害・医療・町づくり　の考え方

静岡市ではどこも、「公助」で対応できない被害が想定されています。
住民同士で助け合う「互助」を機能させることが大事です。そのための訓練が必要です。
「互助・公助」での難しさを認識することは、きっと「自助」につながるでしょう。
平成13年、医療が中心になり、行政、中学校、様々なボランティア団体に呼びかけ「静岡地区災害時医療連絡会」を組織し、連合町内会に呼びかけ訓練を続けてきました。
「東海地震と戦う町づくり」とは、市民が自分たちの置かれている状況を理解し、おらが町を守る技術を習得することです。
これまでもいくつかの町内会と訓練を行ってきましたが、我々には町内会に広げていく方法、宣伝力が欠けており、一つの町内の訓練を翌年隣の町内で実行するような形で広げてきました。
今年度静岡市の「静岡市協働パイロット事業」に応募し、井宮連合町内会とトリアージ訓練を実行し、城北連合町内会とは自立訓練を実行し、市民講座で静岡市の防災指導員の皆さんに、おらが町を守るために、東海地震と立ち向かおうと呼びかけ、われわれの活動を宣伝できたことはとても大きなことでした。
あちこちに広がっていくことを期待します。
将来すべての町内が同じ日にいっせいに訓練できれば、静岡市に要請をかけても市で対応できないことや、それどころか連絡さえままならないこと、消防や医療を当てにしていてはおらが町を守れないことを肌で感じられると思います。

4）提言

城北学区に配布した表を見れば、住民が自分の地域を守る準備をしておかなければ、阪神大震災の二の舞になると思います。東海地震の規模は阪神大震災よ

りはるかに大きいことを考えると、もっと厳しいかもしれません。
本番になって、どこからも助けが来ないことが分かってから動き出すのでは、助けられる命を失うことになります。
直面しなければならない景色（地域の被害想定と消防や医療に頼れない状況）を知ることは、自分や家族や友人を助けるために何が必要か、を考えるきっかけになります。
ＮＰＯ法人「災害・医療・町づくり」のメンバーは本番のときは、それぞれの持ち場で仕事をしなければなりません。皆さんの所には行けません。だから平時の今、地域が自立して地域の人たちを助けるための技術を学ぶ訓練を計画し、地域の皆さんと少しずつですが実行してきました。
地域でやらなければならないことは、具体的には何でしょうか。

① 倒壊家屋からの救出
② 救護所を立ち上げて地域の医師会員と一緒になってトリアージ応急処置をすること
③ 重傷者の病院までの搬送

この三つは地域でやらなければならないでしょう。
これらを訓練をするなかで、住民にも訓練の必要性が理解でき、必要な技術を学べます。
しかし一気に全てを訓練するのは難しいでしょう。城北学区でもこれまで３回の訓練を経て、ユンボが登場する今年の訓練に進んできました。まずはトリアージ訓練をする中で、地域の置かれる状況を町民が理解してもらい、地域を助けるために必要な技術を覚える訓練につなげていきたいと思っています。
ＮＰＯ法人「災害・医療・町づくり」は声をかけていただければ、一緒に訓練をしていきます。準備していたために、訓練をしていたために、東海地震で助かった命があれば、そんなに嬉しいことはないでしょう。